

親が部屋でたばこを吸うと、吸って吐く煙以上に有害な副流煙（くすぶっているたばこから流れてくる煙）がたまり、空気はたちまち汚れ、こどもは受動喫煙（環境喫煙）してしまいます。たばこの煙の中には、ホルムアルデヒドなど少なくとも60種類の発がん物質と、ニコチンと一酸化炭素を含む数種類のこどもの発達に毒になる物質を含むことが知られています。

母親の喫煙が胎児に影響するように、乳幼児にも喫煙は大きな健康被害をもたらします。

母親あるいは父親がたばこを吸うと、受動喫煙・環境喫煙の状態にこどもは置かれ、いやおうなくこどもが喫煙することになり、こどもの病気が多くなります。

どんな病気が多くなるかというと：**風邪や気管支炎に罹りやすくなり、気管支喘息が起こったり、悪化したり、慢性の気道炎症（慢性気管支炎など）**あるいは**中耳炎**にも罹りやすくなります。

さらに恐ろしいのは、赤ちゃんが突然死ぬ病気、乳幼児突然死症候群（SIDS）も起こりやすくなることです（別記）。また、こどもの発育・発達も障害されると言われています。

こどものいる室内や、こどものすぐ側では、絶対に禁煙です。どうしても吸いたい人がいたら、外に追い出し、夜ならベランダでのホテル族になって

もらいましょう。

Sudden Infant Death Syndrome （乳（幼）児突然死症候群）

既往歴によっても剖検で追求しても、原因が特定できない乳児の突然死で、生後1ヶ月から1年までの時期に発生する乳児の重要な死因の1つで約30%を占めます。その原因についても、うつ伏せ寝、受動喫煙、社会経済的因子が挙げられています。特に受動喫煙が関係することは早くから指摘されており、母親の妊娠中の喫煙、更に出産後の喫煙が加わるとその危険性は4倍強になり、母親が喫煙する場合は、その頻度は更に高くなるといわれています。そのメカニズムとして乳児の受動喫煙すなわち、一酸化炭素とニコチン曝露による呼吸調節システムへの影響や気道感染の危惧などが挙げられます。